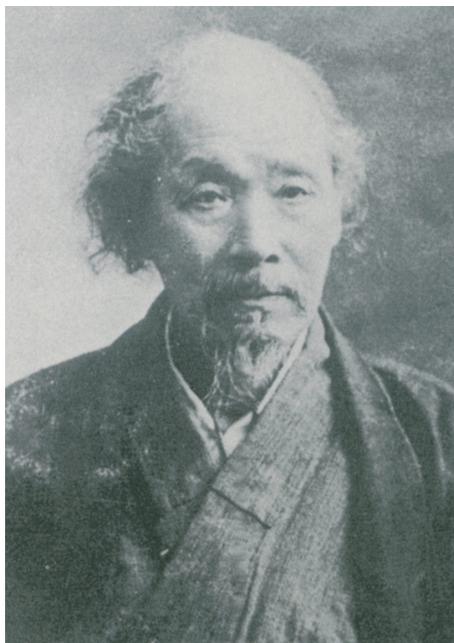


# 阿波の名医 関 寛 齋

(せきかんさい)



1 戊辰戦争が二人の人生を大きく引き離した。三洋の失意の経過については五五号で触れた。一方、関寛齋は凱旋帰藩し西洋医学の指導者として迎えられたのである。

関寛齋（一八三〇—一九二二）

は、千葉県東金市（当時、上総国山辺郡）に生まれ、母が病没したため儒学者関俊輔の養子となる。

一六〇〇年四月、オランダの商船リーフデ（「愛」という意）号が九州に漂着した。今年（今年）は日蘭交流の四〇〇周年であり、日本の医学は蘭学により築かれた。蘭学は阿波の歴史にも大きく関わっている。幕末から明治初期にかけて、世直しいくさと呼ばれる戊辰戦争が勃発した。阿波藩医の中で西洋事情に最もよく通じていたのは、蘭学者の関寛齋（図一）と井出三洋。医の寛齋、知の三洋と讃えられた。両者はよく似た経歴であったが、

優秀な寛齋は一八歳で上総の佐倉で蘭学を教える佐藤泰然に入門し、佐倉順天堂で四年間西洋医学を修めた。当時江戸で流行したコレラの防疫活動で高く評価されたが、近代医学の必要性を痛感。親交があった銚子市の豪商（ヤマサ醤油）浜口梧陵の援助で、長崎に遊学した。オランダ海軍軍医ボンペから「医は仁愛なるもの」と学ぶ。寛齋は同門の司馬凌海などと協力し、最新の医薬品を解説した「七新薬」を出版した（図二）。



図3

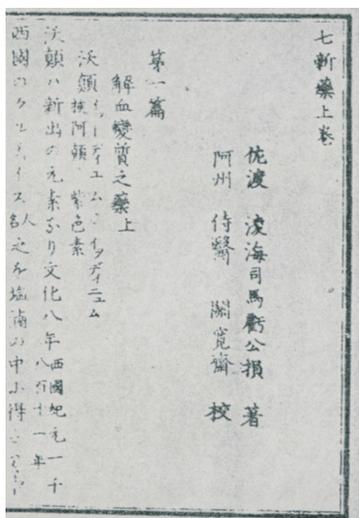


図2

一八六三年に阿波藩医として赴任し、医師学問所蘭学稽古翻訳書教授方を任命された。一八六八年の戊辰戦争により、政府軍は奥羽征討を議決し、蜂須賀茂頼（もちあき）は阿波藩兵の出征を決定。寛齋は奥羽出張病院頭取として敵・味方・兵士・住民すべてに手を差し伸べ、隔離病舎、護衛兵の設置、救護所の旗（図



図4



図5



図6

三)、患者輸送などの功績により、高い評価を受けた。一八七〇年に帰藩後には、徳島藩医学校の開校準備に尽力。ところが、開院式の日、待遇に不満を抱いていた医学校職員らが、来賓の伊吹参事を胸上げして落とすという珍事件が起こり、寛齋は職務を免じられた。彼は復職したが徳島を離れ、海軍省出仕、山梨病院長を歴任後、一八七三年から徳島市徳島本町で医を開業(図四)。三〇年間赤ひげ先生と親しまれ、前の道は「関の小路」と呼ばれた。寛齋は、患者の資産や社会的地位によって診療費に差をつけた。富者には高く、貧者には低く、日清戦役の軍人留守家族や傷病兵などは無料。六割ほどは無料の施療患者で

あり、「関大明神」と崇められたのである。時代に先駆けて種痘を無料で施し、冷水浴、海水浴、森林浴を奨励し、予防医学を実践。厚生・公衆衛生知識の啓蒙活動として、「養生心得草」や「命の洗濯」なども執筆した。「命の洗濯」は四版を重ね、明治天皇、皇后にも献上されたという。七二歳で金婚式を祝賀された後、医業を廃して開拓事業を決意し、北海道十勝郡斗満(陸別町)へ。厳寒の地に苦闘して牧場を開き、自作農育成のため積集社を興した。トルストイの思想に共鳴し理想の農村建設を目指したが、時代に先立つ志の故に自ら命を絶った。八三歳の辞世の句は「諸ともに契りし事も半ばにて

斗満の里に消えしこの身は」。

かつて開業していた場所は、現在徳島県立城東高校の敷地内にあり、学校の玄関に記念碑が建立されている(図五)。この近くの水辺の散策道には、寛齋の胸像が設置され、後ろには蜂須賀の頃からこの松の木が並び控えている(図六)。徳島の医学・医療の発展と将来を、寛齋がしっかりと見守っているかのようだ。

(徳島大学医学部同窓会青藍会会報  
第五五号…二五―二六、二〇〇〇)

図一…関寛齋の像

図二…「七新薬」。当時の最新の医薬品七種類の薬剤とは、肥沃、硝酸銀、酒石酸、キニーネ、モルヒネ、肝油、サントニンであった。

図三…戦の場で目立つたために、菊の紋章を入れた奥羽出張病院の旗

図四…当時使用された薬瓶

図五…徳島県立城東高校の玄関に建立されている記念碑

図六…中徳島河畔緑地公園にある寛齋の胸像

## Dr. SEKI Kansai

Dr. SEKI Kansai (1830-1912) was born in Chiba prefecture and studied western medicine in Nagasaki. He learned from a Dutch Navy doctor, JLC Pompe van Meerdervoot (1829-1908) and published “Shichi-shinnyaku (Seven new medicine)” concerning the latest pharmaceuticals.

He was invited to Awa clan as the professor of medical school. When Boshin war was begun in 1868, he was pointed out the president of the Ou hospital in Tohoku district, accompanied with high evaluation of adequate management and treatment of all soldiers. Returning to Awa clan in 1870, he was involved in the establishment of new medical school and actual medical practice in the central city for 30 years. His philosophy included various activities, such as vaccine, cold water bathing, preventive medicine and epidemiology. His publication “Laundry of human life” was printed in 4 editions and presented to the Meiji Emperor and Empress.

At 72 years old, he quitted medical practice and went to Hokkaido for pioneering cold land for agriculture. He sympathized with Tolstoy’s philosophy seeking for ideal farmer world, without successful result. A bust of Kansai has been installed on the promenade along the waterfront nearby this headquarter office of Tokushima University. Dr. SEKI seemed to expect the development and future of Tokushima's medicine and medical care.